

#### 第四話 『』の字

仕事から戻った『マナ』は、『』の『』に文字を教え色々と役立たせたいと考えた。仕事はまだとしても、すぐに何処かに物を置き忘れてきてしまったり、『マナ』の服を間違えて着てしまうので、『』の『』の持ち物に、自分の名前を書かそうと考えたのであった。

しかしいくら教えても、『』の『』はなかなか覚ええない。『』の『』の字は『じつだ』。『マナ』は少しイライラしながら教えている。「今度は『ら』だ。『ら』の字は『じつ』。それは『ち』の字だ」。かなりイライラし始めたようだ。どうやら自分の興味の無いことには、関心がないようである。『』の『』にしてみれば、置き忘れや『マナ』の服を間違えて着ることなど、『じつだ』でもよいようである。しかし『じつだ』の『ら』の『』の字は覚えることが出来た。『』の字のどこに興味があったのかはさだかではないが、旅から持ち帰った薄汚れた風呂敷に、『渦巻きとも』の『』の字とも、判断付かないような字をやたら書きまくった。さらに薄汚れたシャツの真ん中には、『大きな』の『』の字を書き込んだ。『ら』は『』の字を、何故か気に入ったようである。

しかし相変わらず、『マナ』の服を間違える癖は、直っていないようであった。今日も『マナ』から小言を言われている。『』の『』の服は『じつ』。俺の服にまで『』の『』と書くんじやない。しかし気に入らない。『』の『』を見て、『マナ』は思わず自分の服にも『マ』と書き始めた。ムキになる『マナ』も『マナ』である。本当は『』には着替えの服など無かったのである。そこで間違えた振りをして、『マナ』の服を着ていたのであった。『』の『』はそんな『マナ』を不思議そうに見ていた。

